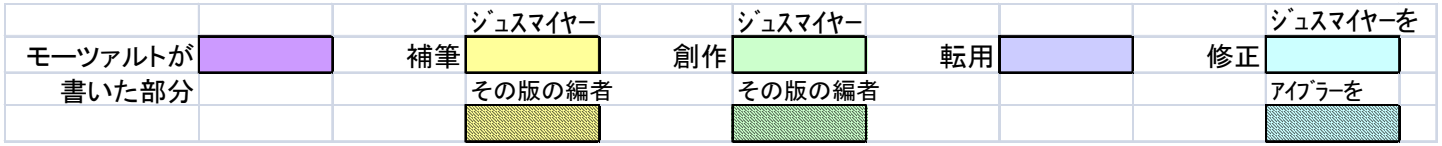
4. 20世紀以降の版

1963年	アーメン･フーガのスケッチ発見
1966年	新モーツァルト全集レクイエムの巻刊行 ・モーツァルトの書き残した部分 ・補作されたもの（ジュスマイヤー版）
1971年	バイヤー版の初演（ミュンヒェン）
1986年	モーンダー版の初演（ロンドン）
1990年	ランドン版の初演（ロンドン）
1991年	レヴィン版の初演（シュツットガルト）



バイヤー版　ミュンヘンのヴィオラ奏者バイヤー（Beyer, Franz, 1922-）による版。
ジュスマイヤーの構成を踏襲しつつもその誤りや拙劣さを洗い直そうとした。1980年出版。

ジュースマイヤーの補筆や初期の印刷譜に見られる様々な音楽上の誤りを取り除き、非モーツァルト的な書法を洗い流すことを目的に、オーケストレーションの改訂を行った。低音の和音付けにおいて、モーツァルトの他の作品を手本とし、それを基にテンポ、強弱法、アーティキュレーションの修正にあたっている。また、＜サンクトゥス＞と＜ベネディクトゥス＞を締めくくる＜ホザンナ＞では、モーツァルト的書法の終結部を付け加えている。

単純な筆写上の誤りはもちろん、その稚拙さ、凡庸さゆえにジュースマイヤーが犯さなければならなかった音楽理論上、管弦楽処理上の様々な誤りを訂正し、モーツァルト本来の音楽様式の中へこのレクイエムを戻すこと、それが、「バイヤー版」の意図するところなのである。（ピーター・ブランスコム著・CD92-356解説より）

	イントゥロイトゥス	キリエ	セクエンツィア			オフェルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ
	レクイエム		ディエス・イレ～コンフタティス	ラクリモサ		ドミネ・イエズホスティアス				ルックス・エテルナ
				最初の8小節	残りの部分					
声楽パート										
低音楽器										
その他楽器（オーケストレーション）										

モーンダー版

イギリスの音楽学者モーンダー（Maunder, C. R. F. (C. Richard F.), 1937-）による版。
ジュスマイヤー補筆部分を切り捨てて独自の再構成を試みた。1988年出版。

＜アーグヌス・デイ＞はわずかな手直しを施して残したが、ジュスマイヤ自身の作と思われる＜サンクトゥス＞＜オサンナ＞＜ベネディクトゥス＞の各章は切り落としてしまった。また＜ラクリモサ＞の中のジュスマイヤの作曲した部分は見捨てることにした。だが、ここに何か代替の曲を入れねばならない。

その箇所が入祭文と同じニ短調に戻ること、音楽は＜レクイエム＞のテーマが使われていることなどから、・・・入祭文の中の”テ・デケト・ヒュムヌス”の部分をここに再使用することを思いついた。この”再現部”のあとに《アーメン》のフーガをつけることにした。（中略）オーケストレーションもまた見直しをした。（モーンダー著・CD92-353解説より）

	イントゥロイトゥス	キリエ	セクエンツィア				オフェルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ
	レクイエム		ディエス・イレ～コンフタティス	ラクリモサ		アーメン・フーガ	ドミネ・イエズ ホスティアス				ルックス・エテルナ
				最初の8小節	残りの部分						
声楽パート											
楽器低音部											
その他楽器（オーケストレーション）											

ランドン版

アメリカの音楽学者ランドン（Landon, H. C. Robbins (Howard Chandler Robbins), 1926-2009）による版。

H.C.ロビンズ・ランドン（1926-）はハイドンの権威で、近年はモーツァルト研究に多くのユニークな業績をあげているアメリカの学者である。彼の校訂による＜レクイエム＞は、作品への新たな手入れというより、歴史的状況のフォローという趣を持っており、諸版のうちでも信頼性の高いものと見ることができる。
ランドン版の最大の特色は、従来省みられることのなかったアイブラーの補筆（未完のスコアに直接記入されたもの）を、ジュスマイヤーがその後やり直したものより高く評価していることである。このため、＜セクエンツィア＞のオーケストレーションには基本的にこれが採用され、アイブラーがやり残した部分への補いは、ランドン自身によって行われた。しかしそれ以降の章においては、ジュスマイヤーの補筆を尊重する方針がとられている。（礒山雅著・CD04-142解説より）

	イントゥロイトゥス	キリエ	セクエンツィア			オフェルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ
	レクイエム		ディエス・イレ～コンフタティス	ラクリモサ		ドミネ・イエズ ホスティアス				ルックス・エテルナ
				最初の8小節	残りの部分					
声楽パート										
低音楽器										
その他楽器（オーケストレーション）										

アイブラーの補筆を採用

レヴィン版

アメリカのピアニストであり、作曲家であるレヴィン（Levin, Robert (David), 1947–）による版。
現代的頭脳によるモーツァルト様式のみごとなシミュレーション。

ロバート・レヴィンは1987年、国際バッハ・アカデミーを率いるリリングから指揮法ゼミナールで行われるシンポジウムのために、モーツァルトの「レクイエム」を新たに補筆完成することを依頼された。レヴィン版はモーツァルト没後200年の年、1991年8月24日にヨーロッパ音楽祭（シュツットガルト）で初演された。

レヴィンは自身の補筆に関して次のように述べている。「私の版では200年の伝統を反映させた。できる限り少ない修正によって、モーツァルトにふさわしい性格、織り地、声部進行、流れ、構造を模倣しようと努めた。適切な過去の補筆はそのまま残し、より透明な楽器法をモーツァルトの他の教会音楽から引き出した。」（竹内ふみ子著・CD07-190解説より）

	イントゥロイトゥス	キリエ	セクエンツィア				オフェルトリウム	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	コンムニオ
	レクイエム		ディエス・イレ ～ コンフタティス	ラクリモサ		アーメン・フーガ	ドミネ・イエズ ホスティアス				ルックス・エテルナ
				最初の8小節	残りの部分						
声楽パート											
低音楽器											
その他楽器（オーケストレーション）											

〈その他の版について〉

ドルース版

1994年に出版された、ヴァイオリニストのダンカン・ドルース（Druce, Duncan, 1939–)による補筆版。ヨークシャー・バッハ・クワイアー(Yorkshire Bach Choir)の委嘱による。1984年にヨーク・フェスティヴァルで初演された。

コールス版

2013年に出版された補筆版。2013年9月20日にブレーメンで初演された。クリストフ・ヴォルフ（Wolff, Christoph , 1940–）による著書、*"Morzarts Requiem"*に基づき、モーツァルト自身によるスケッチ、アイブラー版、コールス自身による補筆などを用いて新たに構成し直している。
ベンジャミン＝グンナー・コールス（Cohrs, Benjamin-Gunnar, 1965–）は、ドイツの指揮者、音楽学者。ブルックナーの交響曲第9番の補筆版、モーツァルトのミサ曲ハ短調の完全版などでも知られる。